KSGP26076

汀（みぎわ）の脈絡

近代化により失われつつある筋骨共同体の再考

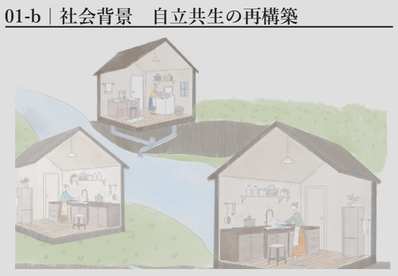
住まいの原点には、水を分け合いながら暮らす生活があった。飛騨金山では、水を媒介とする風土に根ざす暮らしがあり、管理や修繕を共有することで、生活領域は住戸の外へひらかれていた。しかし近代以降、利便性や制度に暮らしを委ねる中で、自立共生の営みは失われつつある。本提案では、切り離された水と住まいの関係を土地の固有性から読み解き、個の暮らしと地域の連関を編み直すことで、後世へと紡がれる新たな共生の風景を築く。

01-a｜社会背景　水場を介した共同性の喪失



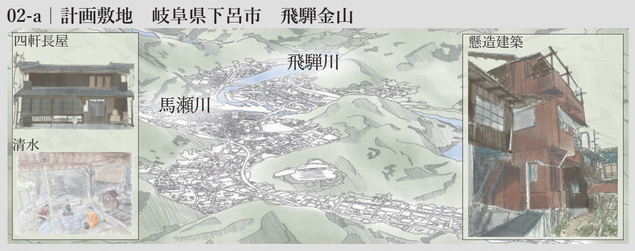
住まいの原点には、**水を分け合いながら暮らす生活**のかたちがあったと考えた。水場や路地を共有する外部化された暮らしの中で、人々は自然と関わり、自立しながら支え合っていました。

01-b｜社会背景　自立共生の再構築



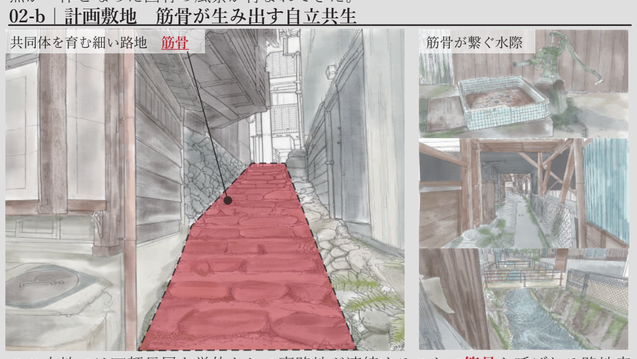
水場や路地が支えてきた共同体は、つくる、直す、分け合う、手を貸すといった自立共生を育み、互いに支え合うための仕組みであった。しかし近代化により、暮らしの多くが個人の**住戸の内部で完結**しやすくなり、日常の中で他者と関わりながら生活をする場面は少なくなっている。そこで、水を介して暮らしを再び外へ開き、**個人の生活を守りながらも、他者と関われる住まいのあり方を考える。**

02-a｜計画敷地　岐阜県下呂市　飛騨金山



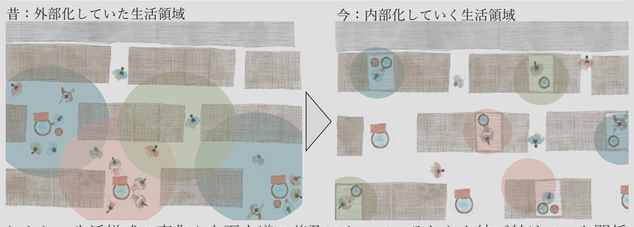
飛騨金山の市街地は谷地形に形成され、人々は地形や水環境を読み解きながら、**四軒長屋**や**懸造**といった建築を生み出してきた。その隙間には**筋骨**と呼ばれる路地が張り巡らされ、**清水**という共同水場が生活基盤として整備されることで、建築と自然が一体となった固有の風景が育まれてきた。

02-b｜計画敷地　筋骨が生み出す自立共生



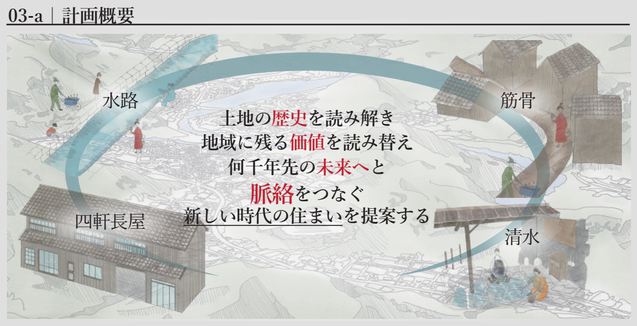
この土地では四軒長屋を単位として裏路地が連続することで**筋骨**と呼ばれる路地空間が形成され、人々は筋骨を通じて水を**利用**し、水路を**管理**し、建物を**修繕**しながら暮らしてきた。四軒長屋、清水、筋骨、水路は複雑に絡まり合いながら相互扶助な暮らしを支え、水の利用や維持管理といった営みを共有することで、生活領域は外部へと開かれていた。

02-c｜計画敷地　生活領域の内部化



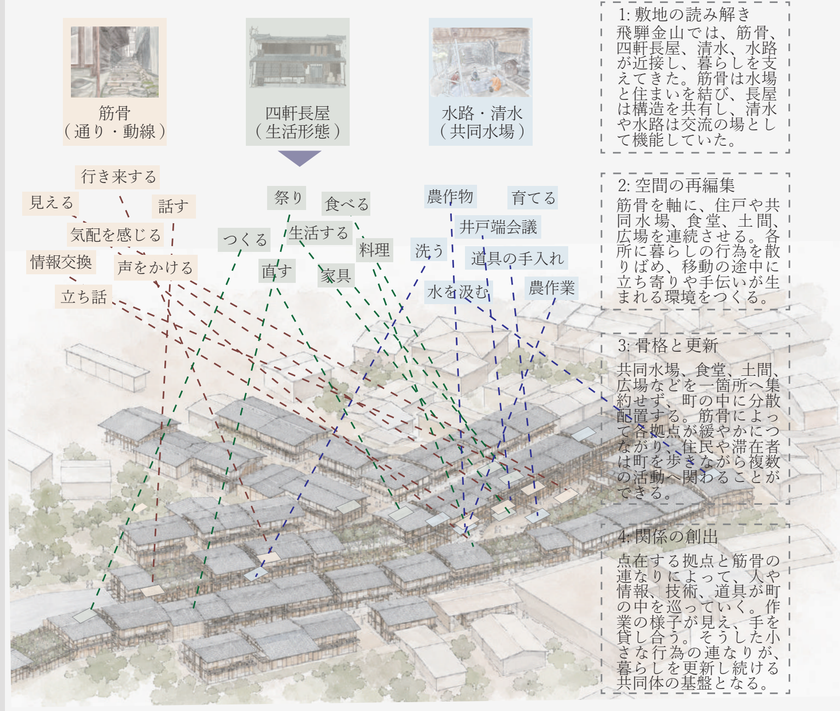
しかし、生活様式の変化や上下水道の普及によって、それらを結び付けていた関係は失われつつある。かつて連続し**外部化**されていた生活領域は**内部化**され、人々が共有していた筋骨も次第に利用されなくなった。

03-a｜計画概要



本提案では、産業や制度に暮らしの多くが委ねられることで、人々が自らつくり、直し、支え合う力が弱まりつつある現代の住まい方を考える。飛騨金山には、清水、筋骨、水路、四軒長屋、懸造建築が複雑に重なり合い、住民同士が知恵や技術を持ち寄りながら関われる環境が残っている。こうした**地域固有の環境**を手がかりに、この土地に幾重にも刻まれてきた**歴史**を読み解き、地域に残る**ポテンシャル**を新たな暮らしへと読み替えながら、過去から現在、そして何千年先の未来へと**脈絡**をつなぐ、新しい時代の住まいを提案します。

03-b｜計画概要



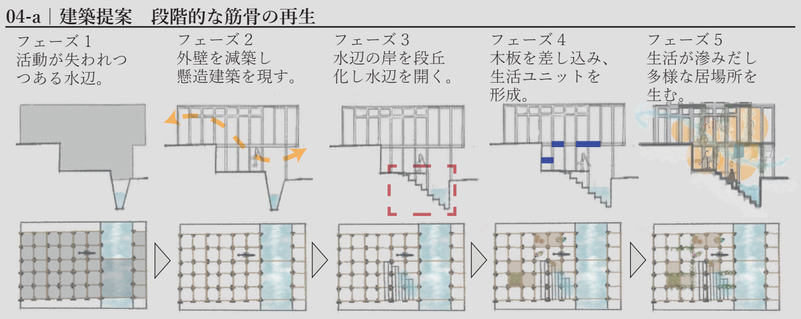
1: 敷地の読み解き
飛騨金山では、筋骨、四軒長屋、清水、水路が近接し、暮らしを支えてきた。筋骨は水場と住まいを結び、長屋は構造を共有し、清水や水路は交流の場として機能していた。

2: 空間の再編集
筋骨を軸に、住戸や共同水場、食堂、土間、広場を連続させる。各所に暮らしの行為を散りばめ、移動の途中に立ち寄りや手伝いが生まれる環境をつくる。

3: 骨格と更新
共同水場、食堂、土間、広場などを一箇所へ集約せず、町の中に分散配置する。筋骨によって、つながりが、住民や滞在者複数がなはの町を歩きながらのことで活動へ関わること。

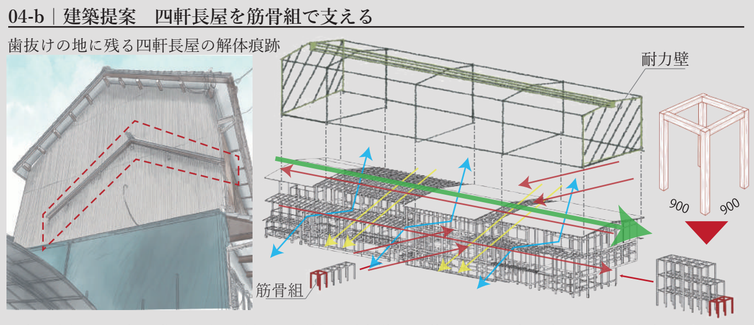
4: 関係の創出
点在する拠点と筋骨のや町作連なりによって、人が連情報、技術、道具が中を巡っていく。業の様子が見え、手を小貸し合う。そうした小さな行為の連なりが、暮らしを更新し続ける共同体の基盤となる。

04-a｜建築提案　段階的な筋骨の再生



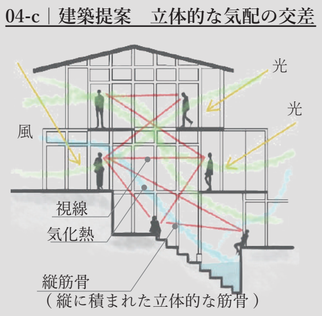
かつて暮らしと結びついていた水辺は、利用の減少や増改築によって閉じられ活動の気配を失いつつある。水辺を塞いでいた外壁を**減築**することで、隠れていた懸造建築や水辺との関係を再び**表出**させ、水際の岸を**段丘状**に**整える**ことで、水辺へ近づきやすい開かれた場をつくり、**内部**と**外部**をつなぐ。躯体に**木板**を差し込み、小さな生活の単位を挿入し、水辺に寄り添う新たな**居場所**をつくる。人の気配や行為が水辺へとにじみ出し、休む、集う、作業するなど、多様な**居場所**が生まれていく。

04-b｜建築提案　四軒長屋を筋骨組で支える



四軒長屋は、四軒の住戸を梁が貫き、両端の耐力壁と一体となって支え合うことで成立してきた。共有された骨組みは、洪水時の力を受け止めながら、地域の暮らしを支えてきた。しかし現在では、空き家となった住戸の解体により、長屋は歯抜け状となり、構造的なつながりも失われつつある。そこで、**筋骨の幅 900mm** を基準に、四軒長屋の内部へ筋骨組を縦横に挿入する。歯抜けとなった部分や不安定な箇所を補強しながら、生活の縦横方向に貫く骨組みとして再構成する。

04-c｜建築提案　立体的な気配の交差



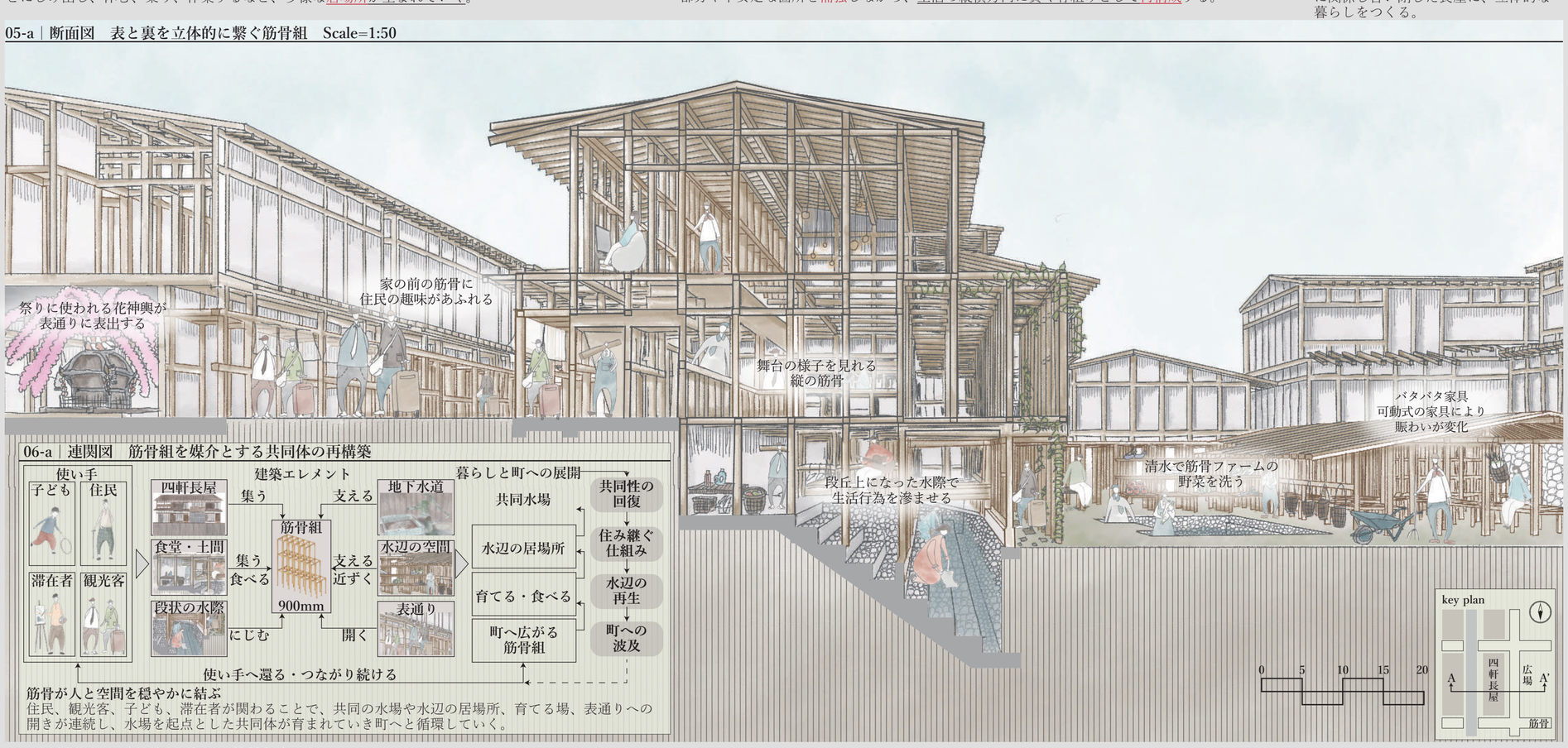
減築によって床や壁の一部を取り払い、光・風・視線・水辺の気化熱を巡らせる。作業や生活の様子が見え隠れすることで、個々の居場所が孤立せずに関係し合い閉じた長屋に、立体的な暮らしをつくる。

04-d｜建築提案　土着性の反映

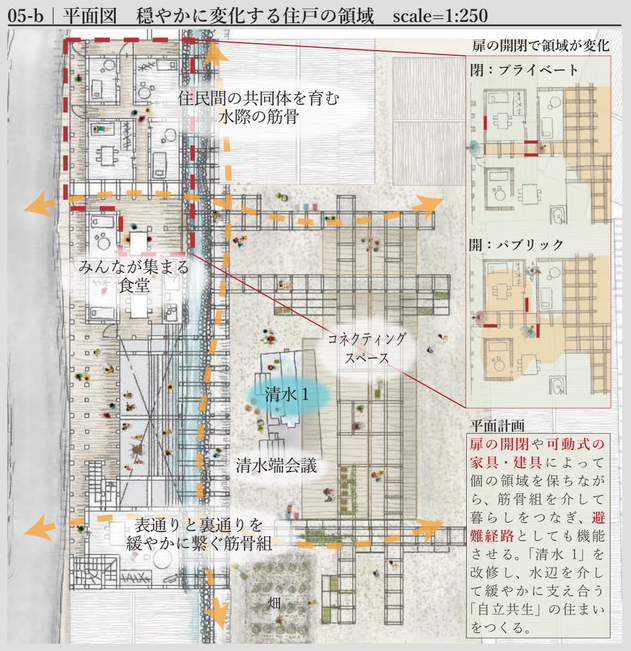


筋骨が飛騨街道と劇場通りを穏やかに結ぶ
現在も残る地域に点在する土着的な営みを読み解き、筋骨によって穏やかにつなぎ直す。点として残る活動は、筋骨を介して線となり、面へと広がることで、過去から連続しながらも現代に応答する新たな暮らしの風景を編んでいく。

05-a｜断面図　表と裏を立体的に繋ぐ筋骨組　Scale=1:50



05-b｜平面図　穏やかに変化する住戸の領域　scale=1:250

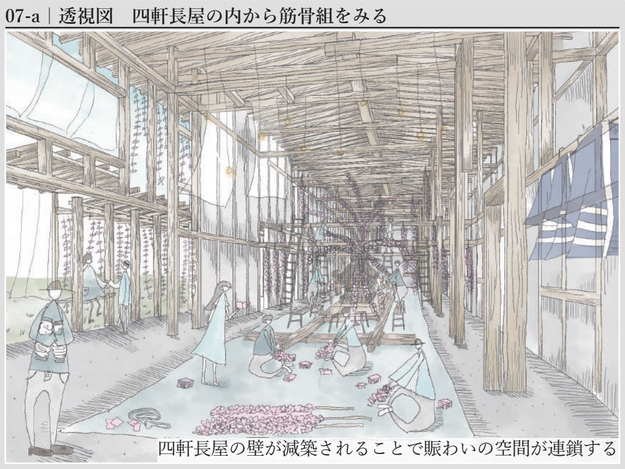


平面計画
扉の開閉や**可動式の家具・建具**によって個の領域を保ちながら、筋骨組を介して暮らしをつなぎ、**避難経路**としても機能させる。「清水 1」を改修し、水辺を介して緩やかに支え合う「自立共生」の住まいをつくる。

06-a｜連関図　筋骨組を媒介とする共同体の再構築

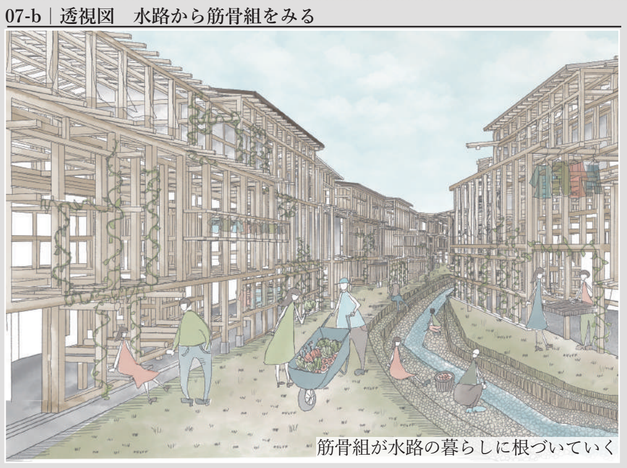
筋骨が人と空間を穏やかに結ぶ
住民、観光客、子ども、滞在者が関わることで、共同の水場や水辺の居場所、育てる場、表通りへの開きが連続し、水場を起点とした共同体が育まれていき町へと循環していく。

07-a｜透視図　四軒長屋の内から筋骨組をみる



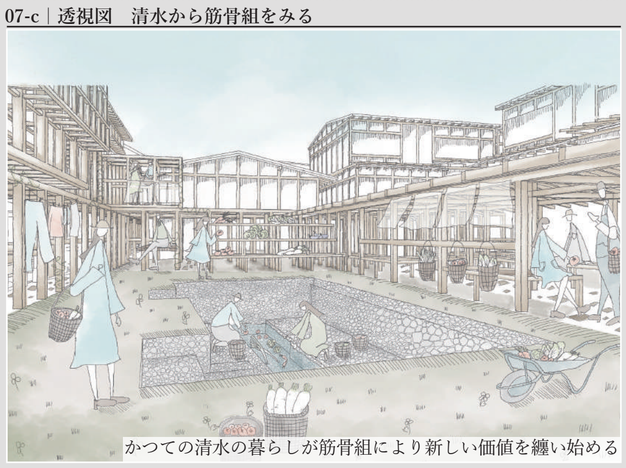
四軒長屋の壁が減築されることで賑わいの空間が連鎖する

07-b｜透視図　水路から筋骨組をみる



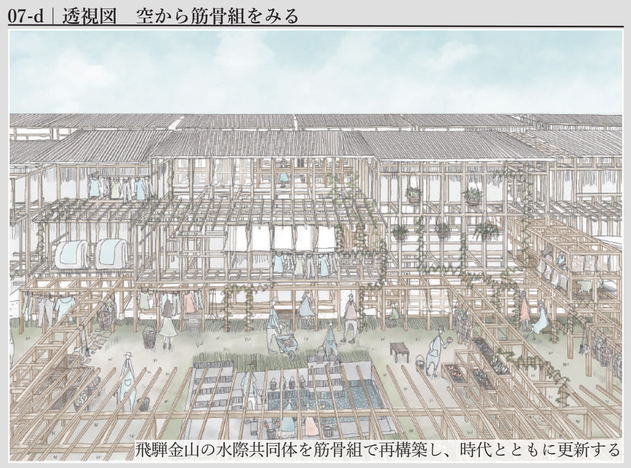
筋骨組が水路の暮らしに根づいていく

07-c｜透視図　清水から筋骨組をみる



かつての清水の暮らしが筋骨組により新しい価値を纏い始める

07-d｜透視図　空から筋骨組をみる



飛騨金山の水際共同体を筋骨組で再構築し、時代とともに更新する